

韓国の七奪を論破①

日 韓 の 眞 実

(1) 「国王を奪った」への反論

私達は朝鮮人の民族性を愛国の国士元大統領の朴正熙（第5-9代大統領、「漢江（はんがん）の奇跡」と呼ばれる高度経済成長を実現したと評価されている。第18代大統領朴槿恵の実父）の遺言から学んだ。

この民族の中にも朴氏の如く良識ある人物も居るはずである、又愛国の士も居るはずである。歴史を見れば、秀吉の朝鮮出兵時、朝鮮水軍を率いて日本水軍を破った名将・李舜臣（リ・シュンシン）将軍や、フランス艦隊（1866年）・アメリカ艦隊（1871）の侵入を撃退したプライドのある民族であった。そのうえ朝鮮民族の安全を謀りながら、朝鮮の近代化の為に日本との併合という苦肉の画策をした知恵と勇気を持つ人達も居たということもできる。

この人達は日本統治36年間を通じて、日本人特有の、どの文明国家も持ち得なかった人間愛・人類愛・アジア観を利用して、最も短期間に西洋の近代文明を受け入れ、朝鮮の人々の努力も加わって見事に目的通りに近代化を成し遂げた。との「誇れる歴史観」も考えられよう。朴正熙もそのように考えた一人であったのではないだろうか、との私観もある。



朴正熙

このような史実は、今はすでに、誰も納得し理解できる一次資料というものが誰にでも見られるようになってきている。しかるに現在も韓国政府は日本に対し、いわれなき非難を吹きかけ、それに対し何の検証も・歴史の真実をも学ぼうとせず、反射的に謝罪を繰り返し、その結果「日本の残虐な朝鮮統治」と「無気力で・意気地の無い・やられっぱなしの恨みと嘘で固まった恥知らずの朝鮮民族」という捏造された歴史観が定着してしまった。その結果、朝鮮人の近代化へ「日本人と共に努力した功績も・誇りも」全て否定されてしまった。

その上「被虐待民族」として「自らを貶める国家観」を世界に広める如き「七奪教育」が何故教科書で教えられるのか、理解に苦しむ。これを恥としない国民性は、長年の「事大主義」「小中華思想」による「歴史の地下残痕」（前回で学ぶ）が原因するのだろうか？

悪いことに日本も占領軍によって、日本の歴史は否定され「侵略国」の烙印を押され、己の中に流れる血を恥じ、祖国に対する愛情や誇りも持てない捏造歴史観に犯された多くの政治家も跋扈（ばっこ）していたことが、日韓関係をさらに歪んだ関係にしてしまったようだ。

この歪んだ関係を断ち切る為には、お互いに攻撃し合うのではなく、徹底的にお互いの国の歴史を明らかにし、今も存在しているであろう元朴正熙大統領の如き、正義と理性の持主の人達と、日本人と朝鮮人が誠意をもって共に朝鮮近代化に向け助け合い、協力し合った歴史を共に世界に誇り合えるような相互理解と互惠平等の関係を取り戻すことしか、日韓正常化の道は他にあるまい！
.....と思う。

いま韓国国内では、反日を唱えるほど愛国者とみられるこの現実、我々の想像を絶する反日感情である。この「反日思想」は己の失敗を外に向けるために屢（しばしば）用いられている。

長年の「七奪教育」で洗脳された国民は、反日感情の源泉となっている「七奪教育」に縛られ無茶苦茶な誤解と偏見を植え付けられ「恨」という感情を生み、異常な思い込みから日本を「永遠の敵」として刷り込まれている。

この政治的意図をもった「七奪教育」のカードは政治家が国民を自由に操る手段としても多用されており、歴史の真実が益々国民からは遠のいている。

最近 88 歳の韓国教授は「もう逮捕される覚悟で言う。韓国歴史の 90% は歪曲である。このようなことはもうやめるべきだ『韓国の歴史、慰安婦問題』とあり、これは私の使命であり命を懸けた訴えである」.....と。

〔チェ・キホ 伽耶大学客員教授 1923 年生〕

チェ・キホ教授がかくの如き、命をかけた使命感を抱いて下さるような、朝鮮民族の為に誠意と善意に満ちた教育を、嘗て日本は半島の人達にしたのである。教育勅語で示されたように、当時の日本人は積徳国家の一員として、他国にも実践したのである。今、我々は反省と共に先人達の徳を偲び、手本とし、誇りとしたい。

また朝鮮の日韓併合以前の糞尿だらけの、世界一不潔な国、両班の凄惨な人民への拷問や刑罰、身分制度等を百田尚樹氏著書の「今こそ韓国に謝ろう」やケント氏の著書を読むと心が重く、憂鬱になる。しかし正義感と誠の心を持った人達が韓国に存在しておられる間に、我々はその人達と共鳴し、朝鮮人に真実を知ってもらう、理解してもらう努力をすべきだ。

その為にも「七奪」を論破できる、真実の歴史を語れる知識を持つ必要がある。それにしても両国民共に、自国の歴史の真実を、あまりにも知らな過ぎはしまいか？

さて誤解と偏見によって出来上がった対日イメージの根源たる「七奪」とは、韓国にとってどのような必要性があり、どのような歴史的経緯で「七奪」という嘘が必要だったのであろうか？何故韓国にとって「反日」を「国是」とすることが必要となったのであろうか？我々はその底の部分をもっと知る必要がある。

結論から述べると、日本敗戦後、半島は日韓併合から解放され、新生独立国になったのであれば、李垠（リ・ギン）殿下の李王朝の「大韓帝国」としての名のもとに主権国家として成立されるのが筋であろう。ところがアメリカに亡命していた李承晩（韓国初代大統領。1952年に彼が一方的に行った海洋主権宣言、いわゆる李承晩ラインにより、韓国の実行支配が始まった）が李垠殿下の帰国を妨害し、李王朝に対するクーデターによって政権を奪い、共和国として独立を宣言した。



李承晩

しかしこれでは国家としての正当性に疑問が生じる。そこでまた嘘の筋書きを作る必要性が生じ、李政権は「李王朝はすでに日本によって滅ぼされていた」ので「李承晩が王朝滅亡後、大韓民国臨時政府が正当な政府となり、次に大韓民国臨時政府軍が日本の植民地支配下で辛酸をなめていた韓国人を開放した」...とのストーリーを捏造し、建国の大義名文としたのである。

独立国として歩む為には、民族としてのアイデンティティを早急に取り戻す必要があり、その為には小中華思想で「日本より文化的に優越した小中華の民」としてのアイデンティティの回復と共に、韓国人の「日本による史上、類を見ない残虐な圧政からの解放」というストーリー捏造の為には「ストーリーの实在の証明」が必要であり、その証明の為に「七奪」が生まれた訳である。

民族の誇りを取り戻し、建国の正当性を担保するため、韓国は反日が国是となり、その為にも「七奪」や慰安婦が必要となったのである。嘘が世界に発覚するのを恐れて慰安婦問題を必死になって押し進めているようにも思います。「憐れむべき哉韓国」という感想です。

<韓国が糾弾する七奪とは>

- ① 国王を奪った
- ② 主権を奪った
- ③ 土地を奪った
- ④ 国語を奪った
- ⑤ 姓名を奪った
- ⑥ 命を奪った
- ⑦ 資源を奪った

以上が七奪である。

①「国王を奪った」...への反論

中韓の文化には過去・現在・未来に於いて、日本のように「水に流す」という文化はなく、過去が未来にまで「恨」として残り、人間関係・国家間関係が縛られてゆく文化です。悪いことに、その事実が「ありのままの真実」ではなく自分に都合の良い様に「あるべき事実」に変えられる文化なのである。これは日本の文化に対する考えとは真逆なのかも、と思われます。

韓国にとって日韓併合時代悪の限りを尽くした、との認識が定着すれば日本人から誇りと自信を奪い、韓国は日本人に対し精神的・道徳的に有利な立場に

立つことが出来るし、外交上も有利な「切り札」となることを彼等は狙っているようだ。これは日本の政治家に注意を促す点でもある。

「在るべき過去」を作る為に、単に「悪行をした」という具体性なき非難は通用しない為反日学者を集め、統治時代に日本は七ツの大切なものを奪った、と具体的で信用され易い「嘘の歴史物語」を作り上げたのである。我々日本人はこの世界に発信される捏造と歪曲に覆われた虚構性を天下に曝し、併合時代に示した日本の誠意と徳性を世界に示すべきである。

李承晩の国王排斥の非行の目を逸らし、原因を日本に向けるため、まず「国王を奪った」を最初に挙げている。

(反論)

日本国は李王家を日本皇族の一員として温かくお迎えし、皇帝・純宗は「李王」として高い位に就かれ、日韓の皇室が融合した。併合後、李王家歳出として毎年百八十万円（1円＝現在の1万円強・約200億円強）が計上されている。また日鮮互惠の礎を使命とする為、梨本宮方子（まさこ）女王が李王家の後継者である李垠（リ・ギン）殿下に嫁がれた。当時15歳の若さで一人朝鮮に渡られ、李方子（リ・マサコ）妃殿下として立派にそのお役目を果たされた（李垠殿下の死後も朝鮮半島に残られ、生涯を障害者教育に捧げられた）。



婚礼時のお二人



障害者教育施設にて

植民地の王室をことごとく廃止した欧米列強の「植民地支配」とは根本的に異なる。李王家に日本の皇族が嫁がれることだけでも、世界史に異彩を放つ出来事であろう。欧米列強、例えばロシアやイギリスが植民地として統治したなら

ば、恐らく李王家は存在しなかったであろう。日本は国王を奪うどころか、国王を助けたのである。終戦時李垠殿下・方子妃殿下ご夫妻は東京に滞在されていた。27代李王の純宗はすでに亡く、王朝を継ぐのは李垠殿下だけであった。

しかし当時、日韓には国交はなく、殿下は密航してでも帰国する意思を示したが、李承晩大統領がそれを許さず、李王朝復活は断たれた。かくの如く李王朝の復活を許さず、共和制の国家を作ったのは韓国自身である。

「王国を奪われた」と主張するなら、何故戦後、独立時に李王朝を復活させなかったのか、反論したい。

容易に決断できたはずである。

韓国人は、李承晩の責任を追及すべきであろう。

王家を奪ったのは韓国自身である。日本ではない。

「今回は主権を奪った」の反論である。

我々は反論の為の反論ではなく、常に正しい資料（一次資料）からの真実をもって反論し、明白な歴史を朝鮮民族に示し、理解を求めねばならない。

平成29年年7月18日

志雲会代表 有馬正能